

第十六章・降伏

「彼らの目は物憂い悲哀によって

落ちくぼんで疲れていた

そして、その荒れ果てた高地の住まいから

下の平野を見下ろした。

「二人は剣で、

そして一人はエンフィールド・ライフルで傷を負っていた。」

「ラジプー（*ラジャスタンのクシャトリア）の反逆者」ライアル

ついにマムンド族との交渉は結論に達し始めた。部族は本当に平和を望んでおり、旅団に谷を去らせるために犠牲を払う用意をしていた。今やカルのカーンは価値ある助力を見せた。彼は一貫してサーカーと和解するよう彼らに促し、彼らがライフルを返すまで軍隊が去らないことを確信させた。ついにマムンド族はライフルを手に入れると言った。しかし、悔い改めの道は茨（*原文では石）の道であった。部族民がいかなる代価を払っても和平することを決定したまさにその夜、山の向こう側のクナール溪谷から戦いに飽き足りない千人の好戦的なアフガニスタン人が到着し、すぐにキャンプを攻撃する意思を発表した。マムンド族は彼らを思いとどまらせた。カルのカーンの郎党たちは彼らに、どうか分別をなくさないように、と懇願した。最終的にこの歓迎されない盟友は立ち去るよう説得された。しかしその夜キャンプに攻撃があるかもしれない、という警告があった。そこで予備歩哨は二倍とされ、すべての兵士は準備良く服を着たまま寝た。マムンド族が私たちに敵から守っていたという事実は、状況に悲哀をもたらした。哀れな部族は新たな交戦に直面しないよう、「狙撃手」やその他の襲撃者を追い払うための見張りをキャンプの周りに配置した。彼らの誠意は疑う余地がなかった。

翌日ライフルの最初の一回分が引き渡された。一六日に第三五シーク隊から奪われた一五丁のマティーニ・ヘンリーがカルのカーンの部下によってキャンプに運び込まれ、将軍のテントの前に置かれた。ほとんどすべてが剣で滅多斬りにされて傷だらけであり、それを所有していたシーク隊員が最後まで戦って死んだことを示していた。おそらく、これらは過去に作られた他のどの銃器よりも血と財貨のコストが高かったであろう。残りの二一丁は後で、と約束され、その後全て引き渡された。しかし、彼らが地面に横たえたライフルは、「フォワード・ポリシー」の経済的側面に関する苦い批判であった。これらの部族には武器以外引き渡せるものはない。これらの数丁を奪い取るために一か月を要し、多くの人命と数千ポンドを費やした。それは過去最悪の取引であった。「辺境部族の完全な軍縮」が明白な政策である、と人々はべらべら話している。このような結果が最も望ましいことは間違いない。しかし、それを叶えるのはスズメバチの群れに刺された針を裸の指で摘出

するのと同じくらい苦痛で退屈な仕事である。

ライフルの引き渡しの後、協約の議論はスムーズに進んだ。完全なジルガが部族からキャンプへ送られ、徐々に明確な理解が得られるようになった。部族民は自らが被った損失を嘆いた。なぜ、サーカーは彼らのところに来てあんなひどいことをしたのか？なぜ、とディーン少佐は答えた、彼らは和平を破ってキャンプを攻撃したのか？部族の長老たちは、すべての共同体の慣習に従って「若い男たち」に非難を投げかけた。悪を行ったのは彼らである、と言い放った。全員が処罰された。最終的に明確な協約が合意された。そして批准のために同月一日に全体のダルバー（*現地語で会見）が設定された。

こうしてその日、午後の一時頃マムンド族を代表する大きなジルガが、カル、ジャー、ナワガイのカーンに伴われてキャンプから約〇・五マイル離れたナワ・キラ村に到着した。三時、ビンドン・ブラッド卿、主任政務担当官のディーン少佐／副政務担当官のデイビス氏／司令部スタッフの大部分、および他の数人の将校がガイド騎兵隊に護衛されてダルバーに向かった。到着時に將軍は友好的なカーンと握手を交わして彼らをとて喜ばせ、用意されていた席に着いた。部族民は正方形の三辺を形成した。友好的なカーンは郎党とともに左側に座った。マムンド・ジルガは他の二つの面を埋めた。ビンドン・ブラッド卿は左にディーン少佐を伴い、配下の將校を周りに置いて四つ目の面を占めた。

そしてマムンド族は正式に降伏を申し出た。彼らはその行動に深い後悔を表明し、ふりかかった不幸を嘆いた。自分たちは併合を恐れて戦っただけであると声明した。ウムラ・カーンの信奉者を谷から追放することに同意した。まだ引き渡していないライフルについて保証した。そして彼らは厳しい罰に苦しんで服従したので、サーカーは罰金もこれ以上の刑罰も科さないことが告げられた。これには彼らも喜びの色を見せた。全部族民が協約を遵守し、和平を保つことを手を挙げて誓って一五分間のダルバーは終わった。そして解散となった。

戦闘でマムンド族が被った損失については三五〇人の死亡が確認され、その他におそらく七〇〇〜八〇〇人の負傷者がいた。そのため丘の村はすべて負傷者で混み合っていた。この推測は越境してきた部族民の犠牲者を含んでおらず、それはおそらくかなりのものであったが、それに関して信頼できる情報を得ることはできなかった。ビンドン・ブラッド卿は負傷者に医療援助を申し出たがこれは辞退された。彼らにはその動機が理解できず、策略を恐れたのである。消毒薬や麻酔薬なしのこの哀れな男たちがどれだけ苦しんだかは、考えるのも恐ろしいことである。しかし恐らく自然の女神はその代わりとして激しい気質と山々のすばらしい空気を与えたのであろう。

このようにして、マムンド溪谷のエピソードは終わった。一二日の朝、最後の軍隊がイナヤット・キラのキャンプから移動し、兵士、砲、輸送動物の長い列がカルの平原をゆくりとたなびいて行った。部族民は丘に集まって敵の出発を見たが、その光景に彼らが感じたであろうどんな喜びも谷に目を向けると消えてしまったことであろう。一つの塔も、一つの砦もなくなっていた。村は破壊されていた。作物は踏みこまれていた。大量の死傷者を出して、冬が近づいていた。撤退する縦隊を追いかける挑戦的な射撃はなかった。獐猛なマムンド族は戦争にうんざりしていた。

兵士たちは行軍して去ったが、彼らは完全に勝利したと回想することはなかったであろう。一か月間、彼らはイナヤット・キラに宿営して絶えず戦っていた。マムンド族は壊滅させられた。帝国の権力は主張されたが、代償は重かった。一二〇〇人を超えたことのない戦闘部隊において三一人の将校と二五一人の兵士が死傷したのである。

マムンド溪谷でのジェフリーズ將軍の旅団の死傷者は以下のとおり……

英国の将校	……	死亡、または負傷により死亡	七
	……	負傷……	一七
英国の兵士	……	死亡……	七
	……	負傷……	四一
現地将校	……	死亡……	〇
	……	負傷……	七
現地兵士	……	死亡……	四八
	……	負傷……	一四七
その他	……	……	八
合計……			二八二
馬とラバ……			一五〇

この犠牲者リストが長くなった主因は、すでに書いたように、アフガニスタンの国境に近いことであった。しかし、マムンド溪谷の人々の勇氣、戦術、射撃の名声を否定することは不公平で不寛容である。彼らは非常に良くそれに値したのである。どれくらいの間かは不確かであるが、彼らは野蛮主義の見通しの効かない暗がりの中で争い、戦ってきた。やがて彼らは文明と衝突し、文明は——科学戦争の凄まじい光が暴いた憎むべき悪を記録せざるを得なかったが——彼らが勇敢で好戦的な人種であることを惜しげもなく認めるだろう。その名前は、この忙しい世紀においてさえ数年間兵士の心の中に留まるであろう。またイ

ングランドにはそれを決して忘れない家族がいる。しかし、おそらく丘の中腹にむつつりと座ってその居住地の廢墟をじっと見つめている部族民はこれらをすべて理解していなかった。または仮に理解していたとしても、英印政府と終局したことをまだ後悔していた。彼らにとつて名声は高くついた。確かに「栄光ほど高価なものはない」というのは私たちも言われてきたことである。

軍隊は一二日夜、ジャーでキャンプし、翌日にはサルザイ溪谷をマタシャに移動した。ここで彼らはほぼ一週間残った。マムンドのへ罰に怯えたこの部族は、組織立った（* r e g u l a r）抵抗はしなかった。ただ何人かの熱血の「狙撃手」が毎晩定期的に（* r e g u l a r l y）キャンプに発砲した。数頭の馬とラバが撃たれ、ガイド騎兵隊のスワールが負傷した。谷の遠端まで毎日送られた軍の偵察隊は何の抵抗も受けず、部族のジルガは引き渡すよう命じられたライフルを集めるためにあらゆる努力をした。一九日までに全てが引き渡され、二〇日に軍隊はジャーに戻った。そこでピンドン・ブラッド卿はウトマン・ケル族の降伏を受けた。彼らは要求された武器を持参し、マラカンドとチャクダラを攻撃した賠償としての罰金を支払った。

まだ戦闘気分であった兵士たちは、とても平和的な大成功をもたらした政治交渉を焦れながら見ていた。

クライヴ卿とクライヴ卿の後のすべてのインド軍司令官は野戦部隊に文官を付ける慣行を痛烈に批判している。彼らは軍事作戦を妨害し、將軍に干渉することで計画に優柔不断の精神を吹き込むと言われており、またそれはしばしば真実である。マラカンド野戦軍の政務担当官は常に軍の仲間に個人としては人気があったが、多くがその職務上の行動を批判し、その存在に難色を示していた。遠征における文官の義務は、二つある。一つ目は交渉、二つ目は情報収集である。これらの義務のうちの前者は絶対になくはならないものと思われる。部族民の難しい言語と独特の性質は終生の研究対象である。現地の事情、カインの力と影響力／または人々に対する他の支配者、国の全般の歴史と伝統についての知識は完全に専門化されなければならぬ仕事である。部族民が抵抗している間は荒っぽく手っ取り早い方法が優れているが、彼らが服従することを切望しているときは他の何かが必要である。現地人と政府の間すべての問題を理解し、争いのすべての詳細を理解し、両方の観点がある程度認識できる人物が必要である。私はそのようなものが軍隊で見つかるとは思わない。最も有能で完成された人物が注意を払うのは軍の専門職だけで十分である。

これに加えてイナヤット・キラで友好的な監視隊が「狙撃手」を追い払ったとき第二旅団がどれだけ静かな夜を過ごしたか／どれだけ多くの新鮮な卵とスイカが調達されたか、

その地域においてどのくらい容易に手紙とメッセージが運ばれたかを私は忘れることはできない。「私は先進の特派員だったため、パンジコラの電信事務所に報道電文を送る際に常にこの手段を利用した。ルートは敵地の二〇マイルを通過し、これらのメッセージは決して届かなかったことがなく、何度かは公式のデイスパッチや回光通信されたニュースより先に到着した。同様の働きによって、九月三〇日のアグラへの攻撃で殺されたニューズライイエン中佐とブラウン・クレイトン中佐の遺体は安全に速やかに埋葬のためマラカンドに送られた。」これは文官であるデイス氏とガンナー氏が非常に難しい環境下で、我々と実際に戦わなかった部族民との関係を維持することによってなされたのである。

第二の義務については、敵の数と意図に関する情報の収集が、騎兵隊の諜報部門より良く、より適切に実行されると信じることは難しい。將軍がどのような軍事情報を必要としているか理解していることを文官に期待するべきではない。それは彼らの仕事ではない。デイス氏がナワガイでの大夜襲について最も正確な情報を入手して、ピンドン・ブラッド卿に十分な警告を発したことは承知している。しかし一方で一六日の戦闘に先立ってマムンド族についての利用可能な情報が乏しかったことは、その日に被った深刻な損失の主因である。他にも絶え間なくイナヤット・キラに対する夜襲の噂があったため、毎週約三回は軍全体がブーツを履いたまま寝た。文官は外交任務を遂行し、将校は戦争を遂行すべきである。そして情報の収集は軍事上の最も重要な任務の一つである。私たちのパシヤン人 セポイ、諜報部門、そして意欲的な騎兵隊は、將軍がその計画に使用するために必要ならすべての真実を入手する必要がある。少なくともこのように責任を明確に割り振ることができる。

しかし、ある点においては私には疑う余地がない。政務担当官は作戦を指揮する將軍の監督下になければならない。「国家の中の国家」があつてはならない。野戦軍を指揮できるのは一人の人物だけである。そしてその中のすべては彼の職権の下になければならない。政務担当官が、時にその決定に戦争の勝敗と兵士の命が直結している將軍に相談や報告をすることなく、いつでも部族民と協議する権限を持つのであれば、食い違いが起こって困難を生み出し、悲劇を引き起こすであろう。

遠征が続く間は戦争のすべての危険を冒し、それが終わると野蛮な人々の間でその性質を研究し、その気性を観察するために自分の命を同様の危険にさらして生きる、そうした勇敢な人々の感情を傷つけることなくこの主題を議論することは難しい。私はそれと縁が切れることをうれしく思っている。

旅団のバジャウル滞在中、アフリディ・セポイの間でいくつか数件の脱走事件があつた。あるとき、歩哨に出ていた第二四パンジヤブ歩兵隊の五人の兵士が一団となって離脱し、

武器を持ったままティラとカイバル峠に向かって出発した。私はアフリディ族とパシヤン族兵士のいくつかの武勇と行いを記録しているので、勲章の取り消しを提示するくらいで済ますのが適当であろう。帝国の臣民民族のキャラクターや、私たちが多くを依存している現地人兵士のキャラクターに興味がある読者は、おそらくパシヤン族とシーク族を題材とするやや長い余談を許してくれるであろう。

アフリディとパシヤン人兵士を十把ひとからげに裏切り者で信用ならないと断言する人々は、これらの人々が非常に奇妙で間違った立場に置かれていることを忘れてはならない。彼らはその同郷人や同じ宗教を信じる人々と戦うことを要求されている。一方には狂信、愛国心、自然の絆のすべての力が蓄積されている。他方には軍事連合があるだけである。忠誠の誓いを違えるのは間違いなく重大なことであるが、それより神聖ではないと言えない他の義務もある。誓いを尊重することは、個人が社会に負う義務である。それでも、兄弟を絞首台に送る証言をする者がいるだろうか。自然のつながりは古く、他のすべての人間の法律よりも優先される。パシヤン人がその友である同郷人を抑圧するために連れてこられ、抑圧を見つめるだけに留まったとしても、彼は自分がバーク（*エドモンド）の次の言葉の立場にいることに気づくであろう。“道徳は戸惑い、理性はよろめき、そこから恐るべき自然が跳ね返ってくる。”

辺境にはこのことに思い至り、アフリディのジレンマに同情する多くの人々がいる。長い経験と相当な名声を持ち、戦闘で何度もシークとアフリディの両方を指揮してきたガイド歩兵隊の将校は次のように書いている。「個人的には、私たちが侵略した今、彼らが脱走して自分の故郷を守ろうとしたことを責めるつもりはない。彼らがそうすることを望んだのはただ自然で適切なことと思う。」

このような意見は、この主題について語る肩書を持った多くの将校の典型的な見解であると考えられる。彼らの命はいつでもその問題の上にかかっているのである。

シーク隊は進軍の守護者である。それはもともとパシヤンと戦うために創案された。その宗教がマホメダニズムと正反対となるように設計された。これは賢明な政策であった。狂信は狂信と対峙した。宗教的嫌悪が人種の憎悪につけ加えられた。パシヤンの侵略者は山に撃退され、シークはラホールとペシャワルに定住した。強い差異と多くの敵意が今日も残っている。シークは腰まで髪を伸ばす／パシヤンは頭を剃る。シークは飲みたいものを飲む／パシヤンは禁酒家である。シークは死後に火葬される／パシヤンがこれをするとな国へ行けなくなる。兵士としてのパシヤンは射撃がうまく、丈夫で、特に丘の斜面を良く進軍し、そして恐らくそれ以上に素晴らしい闘士である。彼らは教育よりも本能に頼っている。その血の中に戦争がある…生まれながらの射撃手であるが、／汚く、怠け者で、

浪費家である。

シークにはより文明的な人物がいる。思いのままに撃つのではなく、忍耐強い練習によって学ぶ。パシヤンほどタフではないが、レスリング、ランニング、水泳などの力業を喜ぶ。とても清潔な兵士であり、より注意深い。しばしば極度の儉約家であり、常につつましく、通常パシヤンと同様の食事を摂ることはない。「実際にいくつかの連隊では非常に痩せたシークが食物の形で給与を得ており、将校は彼らが太って強くなるまで注意深く監視することになっている。」

シークはライバルが落胆し、失望するような状況下で進み、敵の気力が旺盛ならその根気がなくなると言う人もいる。その主張は事実による裏付けがない。一八九五年バツチェ中佐がパンジコラ川の近くで殺され、ガイド隊が強く圧迫されたとき、アフリディ中隊のサバダーは同胞に向かって叫んだ。「さあ、それでは、ガイド隊のアフリディの皆、指揮官が殺された。今が突撃の時だ！」英国の将校はこの衝動的な兵士たちがその持ち場を離れ、確実な死に向かって突き進んで行くのを抑えるのに最大の苦勞をした。この話はタマイ（*スーダン）の戦闘での有名な騎兵大佐の言葉を思い起こさせる。方陣が破れたように見え、そして興奮して混乱した特派員が戦隊のもとに全速力で荒々しく駆け寄り、すべてが失われたと告げた。「すべてが失われた」とはどういう意味か。第一〇軽騎兵隊がここにいるのが見えないのか？」世界には他の人々が成功から得るのと同じように、災害や破滅の近傍から断固とした喜びを得る人々がいて、他の人々が勝利の中にあるときよりも、その人々が敗北の中にいるときの方が堂々としている。そのような精神は間違いなくアフリディとパシヤンの中に見受けられる。

この議論を締めくくるにあたり、多くの戦闘を経験した年老いたグルカのサバダーの意見を引用したいと思う。彼によれば、自分はシークのほうが好きだったが、すぐにピンチのときにはインドのどの種族よりもアフリディの兵士というようになった、とのこと。どちらも女王陛下下の兵士であることに思いを巡らせるのは心地よいことである。

マラカンド野戦軍にはグルカはいなかったが、これらの邪悪な小さな兵士に言及せずにインドの戦闘民族を考えることは不可能である。見た目は青銅色の日本人のようである。小さくて活発で癡猛で、幅広い顔でいつも陽気に歯を見せて笑っている。彼らはパシヤンの気力とシークの規律を兼ね備えている。彼らはすべての金銭を食物に費やし、宗教、飲酒、喫煙、英国兵のような宣誓に縛られることはない。彼らは―彼らを「ニガー」の種族と見なしている―英国兵の目に他種族に向けられるよりも多くの好意を見出す。彼らは純粹な傭兵であり、危険を歓迎する一方で遠征の延長を嫌い、妻や平時の大きな肉料理の元に戻ることも同じく熱望している。

ウトマン・ケル族に協約を順守するように促した後、旅団はパンジコラ川を再び渡り、連絡線を楽しな行程で行軍してマラカンドに戻った。ガイド隊はマルダンに戻り、再び宿営地に戻ってたちまち戦時から平時に戻った。テイラ遠征に参加する機会を失ったことにひどく失望したバフ隊は、マラカンドの駐屯地に残った。アフリディ族に対する作戦の発令を待ち受け、またブナヴァル族に対する遠征が必要な場合に備えてジャララの近くにかなりの戦力が維持された。

ここで私たちはマラカンド野戦軍から離れる。しかしまだ書かれていないその歴史の一章が残っているかもしれない。この野戦軍から編成された素晴らしい連隊が信頼できる指揮官の下で別の機会に偉大な戦争ゲームをプレイするかもしれない。そうであるなら、読者は紙面において私に話を続けさせるのか、それともその仕事を別の手に渡すかを決めなければならぬ。「マムンド溪谷とバジャウル全域での作戦が独自のクラスプによって記念されていけないことは、軍における名誉と褒賞の授与方法が気まぐれでたらめであることの良い例である。旅団が被った損失は紛れもなく最も深刻なものであった。結果は上首尾であった。軍隊の行動は公式に称賛されている。しかし、私が過去八章で説明したすべての激しい戦いで交戦していた兵士は特別に製造されたクラスプの対象から除外された。彼らは一発の弾丸が撃たれるのすら見たことがない数千人の辺境のすべての兵士と同じ一般的なクラスプを受け取るようになったのである。」